

Title	Native Voice (先住民の声), Intersection (交差性), and Kuleana (立ち位置と責任): 沖縄における「ハワイアン・スタディーズ」コース・デザインの試み
Author(s)	小嶺, 崎原 千尋
Citation	沖縄キリスト教学院大学論集 = Okinawa Christian University Review(16): 33-44
Issue Date	2019-02-08
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/24659
Rights	沖縄キリスト教学院大学

Native Voice (先住民の声), Intersection (交差性), and Kuleana (立ち位置と責任) —沖縄における「ハワイアン・スタディーズ」コース・デザインの試み—

小 嶺 (崎 原) 千 尋

要 約

沖縄キリスト教学院で30年以上も続く「ハワイ研修」の事前学習を充実させるために、「ハワイアン・スタディーズ」が新たに設置されることになった。本稿は、当該科目をデザインするにあたって、筆者のハワイ大学での経験やハワイにおけるHawaiian studiesの動向を概観しながら、あえて「ハワイ研究」とせず、「ハワイアン・スタディーズ」とした経緯や、コースの根幹とした理念 (course approach) について述べることを目的としている。その際、特に当該科目の土台となった、Hawaiian Studies 107というハワイ大学システム全体で広く提供されている科目と、ハワイ大学の一般教養課程におけるカリキュラムポリシーから、特にハワイについて学ぶ科目の基準を定めるフォーカス領域に注目する。そして、そこから導いた、3つの理念的柱: (1) Native Voice (先住民の声、主体性)、(2) Intersection (交差性)、(3) Kuleana (責任、特権、立ち位置) について描写し、単に外からハワイを一方向的にまなぐのではなく、先住民 (indigenous) の視点を中心化した脱植民地主義の視座から沖縄を捉えなおす可能性について論じる。

キーワード: ハワイアン・スタディーズ、ハワイ研究、先住民研究、沖縄とハワイの比較地域研究、コース・デザイン

I am not an American, I am not an American,
I am not an American.

「日本の皆さまへ」

沖縄と同様に、ハワイはアメリカの軍事的植民地と言えるでしょう。アイヌ民族と同様に、ハワイ先住民は自らの土地を奪われた民族です。沖縄が沖縄の人たちに返還されるべきであるように、北海道が先住民であるアイヌ民族に返還されるべきであるように、ハワイもハワイ先住民に返還されるべきなのです。

(ハウナニ=ケイ・トラスク)

はじめに～抵抗するネイティヴ・ハワイアン～

ハウナニ=ケイ・トラスクはハワイ大学マノア校のハワイ研究学部 (Hawaiian studies) の教授であり¹⁾、ハワイにおける1970年代以降の主権回復運動の系譜において、最も影響力を持ったリーダーの一人である。ハワイでは、トラスクのエッセイ集 *From a Native Daughter: Colonialism and Sovereignty in Hawai'i* (1993, 1999再版) が、彼女が共同執筆・制作したドキュメンタリー映画 *Act of War: The Overthrow of the Hawaiian Kingdom* (1993) と共に、ハワイ先住民の権利運動を学ぶ上で広く読まれている。(Franklin and Lyons, 222) ハワイ先住民の学生たちがトラスク

に影響されたように²⁾、私自身にとっても、2004年からハワイ大学に留学した際にトラスクの講義を直接受講し、教室の内外で会話することができた経験が、その後のハワイに関する研究・教育実践に留まらず、沖縄人として沖縄について学ぶ姿勢や研究・教育理念に大きな影響を与えてきた。

トラスクは私が受けた最初の授業で、威厳をもってこう挨拶した。“Welcome to my nation.” (私の国へようこそ。) ハワイは米国の一州ではないのだ、という強烈な印象を受けたことが今でもはっきりと思い出される。政治学者であり、詩人でもあるトラスクは、ハワイアンはみんな陽気で、ハッピーで、人情深く、フラダンスを妖艶に踊り、ハワイは観光客を楽しませる楽園である、というイメージを根底から覆すような歴史学的、政治学的に植民地主義を分析する視座と、抵抗するハワイアンの生き様そのものを見せてくれた。当時、クラスの中で唯一の留学生であった私が沖縄出身だとわかると、いかに日本の植民地主義が沖縄を抑圧してきたか、ハワイ先住民として共感すると彼女は言った。私はそれから、ハワイを知れば知るほど、沖縄の歴史や現状を考えずにはいられなくなった。私にとってトラスクとの出会いが、ハワイが辿ってきた植民地化の歴史と、また同時に、植民地主義に抵抗してきたハワイ先住民の歴史を、沖縄と比較し、重ね合わせる視点を持つ決定的な契機になった。

Hawaiian studies³⁾、すなわち、ハワイ先住民による、ハワイ先住民のためのハワイ研究実践者 (Hawaiian studies practitioners) たちがトラスクの詩について次のように述べている。海に生きた先祖が壮大な航海を通じて知を追求した姿に、ハワイの主権回復の道を想い重ねた詩は、Hawaiian studiesの研究実践のna‘au (肝、内臓、心) に通じるものである。なぜなら、ハワイアンにとって、研究とは「私たちのea (人生、命、息) を導き、(再) 構築し、力を与え、支える‘ike (知識、洞察、理解) に光をあてることである」⁴⁾ からだ。(Oliveira and Wright 2016)

ハワイ先住民たちに新たな息吹と力を与え、支える研究とはどういう研究実践だろうか。またそれは沖縄人としてハワイを研究対象にし、沖縄でハワイについて教育実践する際に、どのような理論的、方法論的示唆を与えるだろうか。これらの問いを主軸にして、本稿は、沖縄キリスト教学院において、30年以上実施されているカウアイ島への「ハワイ研修」に引率教員として携わったことをきっかけに、研修の事前学習を目的として2018年度後期に開講した「ハワイアン・スタディーズ」(以下、「ハワイアン・スタディーズ」とは当該科目を指す) のコース・デザインにおける理論的アプローチについて論じることを主な目的とする。

まずはじめに、「ハワイアン・スタディーズ」という科目を組み立てる際、私自身がハワイ大学マノア校で受講した科目、Hawaiian Studies 107 (以下、HWST 107) を土台とし、そのシラバスや教材を参照したことから、HWST 107を参考にするに至った背景を述べる。そして、「ハワイアン・スタディーズ」のコース・デザインの根幹となった3つの理論的柱、(1) Native Voice (先住民の声、主体性)、(2) Intersection (交差性)、(3) Kuleana (責任、特権、立ち位置) について論じ、「ハワイアン・スタディーズ」のユニット構成について概観する。

I. Hawaiian Studies 107 ~Hawaiian Studies 確立の道のり~

HWST 107はハワイ大学マノア校において、現在はHawai‘inuiākea School of Hawaiian Knowledgeという名称で⁵⁾、Hawaiian studiesプログラムを包括する上位学部組織から、100番台の基礎的な入門クラスとして提供されている⁶⁾。2018年の秋学期には、マノア

校において同科目が20ユニットも同時開講されており、学部生総数12,968名⁷⁾のうち、この1学期だけで771名が履修している。(“University of Hawai‘i at Mānoa · Fall 2018 Class Availability”) 私が記憶している限り、2004年~2008年の時点でもHWST 107は大学全体に広く提供され、ほとんどの学部生が一般教養の選択必修科目として履修する科目であった。当時このようなHawaiian Studiesの科目があり、自分の島の歴史、文化、政治、現代社会問題まで、しっかり学べる環境が整っていることに驚きと共に、うらやましく感じた。大学院生は単位取得する必要のない科目であったが、ハワイの多くの学生が学ぶハワイについての科目とはどのようなものか、沖縄からの留学生仲間とHWST 107を履修することにした。この時に学んだことは、単にハワイに関する知識に留まるものではなかった。共に受講した沖縄出身の仲間と共有した衝撃は、沖縄にもこのような科目が必要だという思いに変わっていった。

HWST 107の具体的な内容については後述するが、ハワイ大学のすべてのキャンパスにおいて、この科目がこれだけ広く開講されるようになるには、実は1990年代まで待たなくてはならなかった。1970年代はハワイの先住民文化復興運動と主権回復運動が特徴づけるハワイアン・ルネッサンスと呼ばれる時代であったが、(Osorio15-21; Trask 87-93) ハワイ大学でHawaiian Studies Programの設置が提案されたのは1977年であり、大学理事会で恒常的な設置が承認されたのが1985年であった。(“Kamakakūokalani Center for Hawaiian Studies History Timeline”)

その時、1986年にハワイ大学における教育者らによって実施された“Hawaiian Studies Task Force Report”ではこのような報告がされている。

ハワイでは、ハワイ文化が商業的に搾取され、墮落させられ続けており、ハワイの言語は無視されるか、もしくは乱用、誤用され、またハワイの歴史は忘れられ、歪曲され、そして、ハワイ先住民は自らの島で土地を奪われている。ハワイ大学システムの10のキャンパスにおいては、このような窮状がHawaiian Studiesとアカデミアにおけるハワイアンの人々の地位の低さに反映されている。

(筆者訳)

In Hawaii, Hawaiian culture continues to be commercially exploited and degraded, the Hawaiian language ignored or abused, Hawaiian history neglected and distorted, and Native Hawaiian dispossessed in their own land. On the ten campuses of the University of Hawaii system, this plight is reflected in the menial status of Hawaiian Studies and of Hawaiian persons in academic matters. Hawaiian Studies Task Force Report, 1986.

(qtd. in Goodyear- Ka'ōpua 4)

このような危機感のもと、Task Force報告が出た翌年にはCenter for Hawaiian Studiesが設立され、1991年によろやくHWST 107が大学の芸術及び人文科学区分のコアコース（選択必修科目）として承認された。同年にはハワイ州議会がCenter for Hawaiian Studiesの校舎建設の予算を承認し、1996年にHawaiian studiesを象徴する建物が完成した⁸⁾。その後、2005年にはマノア校からはHawaiian Studies及びHawaiian Languageの分野での修士号の輩出が始まり、ハワイ島のヒロ校校では、近年からハワイアン及び先住民言語・文化復興の分野において博士課程が設置されている。（“Kualono: Ka Haka ‘Ula o Ke‘elikōlani”）

このように1990年代に整備されたHawaiian studiesの学生として学び、ハワイアン・ルネッサンス世代の次世代として、現在ハワイ大学で政治学部の准教授であるハワイ先住民研究者、Goodyear-Ka'ōpuaは、Task Forceの報告が出てから約30年経った現在、「ここまでハワイアンがハワイについて書くことが盛んになることは、アカデミアにおけるハワイアン・ルネッサンスの第一世代は想像していなかったかもしれない」と述べている。（“Reproducing the Ropes of Resistance” 4-5）Goodyear-Ka'ōpuaは続けて、先住民研究者（‘Ōiwi researchers）として、自らの声を見つけること、すなわち、先住民という立ち位置、アイデンティティ、主体性を中心化し、先祖と地域との繋がりを育むことが研究実践過程において最も重要であると主張している。これは、ハワイアンが抑圧されてきた植民地化の歴史と同時に、1970年代からハワイアン・ルネッサンス第一世代が文化復興と主権回復、脱

植民地化や脱軍事化を求めて闘ってきた抵抗の歴史を受け継ぐ次世代としての主張である。このハワイ先住民の声を中心化する理念＝Native Voiceは、HWST 107を含む、Hawaiian studiesプログラム全体にも反映されている。

II. 「ハワイアン・スタディーズ」における理論的柱①：Native Voice

ハワイ大学マノア校のKamakakūokalani Center for Hawaiian Studiesのホームページに、センターの理念が掲げられている。そこには、まずハワイ先住民の視点を重視することが強調されている。

Kamakakūokalani (Center for Hawaiian Studies) は自己決定権を含むハワイ先住民の視点を主張し、100年以上も前に米国による併合に抵抗し、Kū‘ē請願書に署名した何千人ものハワイ先住民を称えることを約束する。

Kamakakūokalani is committed to representing Native Hawaiian perspectives including self-determination and honoring the thousands of Hawaiians who more than a hundred years ago signed the Kū‘ē petition opposing and protesting the annexation by the United States. (“The mission statement of Kamakakūokalani Center for Hawaiian Studies”)

Kū‘ē請願書とは、1897年の米国によるハワイ王国併合に際して、ハワイ先住民が併合反対の署名をしたものであり、その原本が、1990年代にハワイ先住民研究者、Noenoe K. Silva (2004) によってアメリカ国立公文書館で発見された。これは、ハワイアンは併合に抵抗しなかった、という西洋中心主義的な歴史認識を覆す画期的な発見であり、請願書は紛れもなく、署名したハワイ先住民の失われた「声」であった。その声が発見されるまで約100年もかかったという背景には、どれだけ先住民の声は黙殺され続け、なかったことにされてきたのか、植民地主義がもたらす先住民の声の排除、暴力が浮き彫りにされる。Kū‘ē請願書は学術的、政治的にも画期的な発見であったこと以上に、1998年

に一般公開した際のハワイ先住民コミュニティに与えた感動は非常に大きかったという。(Silva 2004)

ハワイ大学という学術組織の場において、きちんと構成されたカリキュラムも、専従の教員も、専用の研究室や教室も、予算もほとんどなかった Hawaiian studies が、(Goodyear-Ka'ōpua 4-5) カリキュラムや校舎を備えた Center for Hawaiian Studies を確立していくこと自体が、ハワイ先住民の声を再発見し、取り戻し、新たな息吹を与える脱植民地化 (decolonization) の過程であったと言えるだろう。

HWST 107 のテキスト集、*Hawai'i: Center of the Pacific: Hawaiian Studies 107 Reader*, Second Edition (Losch and Kamahele)⁹⁾ の “Introduction” でも、この科目のアプローチの要となるのが、先住民の視点を中心化する (“indigenous-centered perspective”) ことだと明記されている。それでは、先住民の視点、先住民の声 (Native Voice) に焦点をあてるということは、具体的にどのようなことだろうか。

まず、HWST 107 のシラバスで統一されている点は、テキスト教材がすべてハワイやその他の太平洋島嶼地域の先住民によって書かれたものであるということである。Goodyear-Ka'ōpua は、先住民ではない研究者による Hawaiian studies への貢献も認識しつつ、先住民研究者 (‘Oiwi scholars) の研究に焦点を当てる必要性についてこのように指摘している。まず、ハワイ先住民 (Kanaka) は歴史的に、教える立場の「先生」ではなく、常に教えられる「生徒」の立場を取らされてきた。「アナリストや科学者」でなく「インフォーマント」であり、歴史や文学においては、「著者」ではなく、「登場人物」であった。二点目に、「引用の政治性」、 “politics of citation” について Goodyear-Ka'ōpua は論じている。これは、意図的ではない場合にしても、ハワイについて研究を行い、ハワイについて書く際に、先住民研究者以外による研究がハワイ先住民による研究よりも優先されることに加担してしまう政治性について指摘している。特にこの30年の間で大きく飛躍したハワイ先住民研究者による業績の豊富さを考えると、ハワイ先住民による研究に真剣に取り組まないハワイに関する研究は、学問的に無責任であり、支持できないと主張している。 (“Reproducing” 5-6)

このような指摘は、エドワード・サイードが『オリエンタリズム』(1978) で提示する、芸術や学術分野を含む文化的な知の生産によって、植民者と被植民者の権力関係が再生産され維持されるメカニズムへの批判的分析と通じるものがある。アメリカの植民地主義・帝国主義というコンテキストの中で、ハワイについての知識がハワイ先住民でない研究者によって、西洋中心主義の学問組織のシステムの中で生産され流通してきた蓄積があり、その再生産に加担しないためにも、先住民による研究を優先するという立ち位置である。

それでは、日本においては、どのようにハワイについての研究は蓄積されてきたのだろうか。山中速人は、商用の文献データベースを基に、過去30年 (1970年～2000年) のハワイ研究を概観し、その傾向を分析している。研究分野については、90% (198件) が人文社会系の論文であり、その中でも日本人移民や日系社会に関する論文が全体の半数弱を占めている。しかし、近年の研究動向としては、ハワイの日系社会に留まらず、他のエスニック集団に対する関心が広がってきていると山中は分析し、その中でも、ハワイ先住民に関する論文が1990年代以降に増えてきたことを指摘している。(313-314) この動向は、ハワイにおける過去30年における Hawaiian studies の発展と重ね合わせて考察することもできる。日本のハワイ研究におけるハワイ先住民に対する関心の高まりは、ハワイ先住民が自らの声をあげ、彼らによる研究が進んだからこそ、可能になったと言えるのではないだろうか。

さらに山中は、近年のハワイ研究においてハワイ先住民の次に注目されているエスニック集団に、沖縄系を挙げている。日系人一般とは異なったエスニック・カテゴリーとして認知されてきた特殊性や、日本における沖縄文化に対する関心の高まりが、ハワイの沖縄系エスニック集団に対する関心の高さに反映されていると分析している (315)。

ここで、私が担当することになった科目のタイトルを「ハワイ研究」とせず、あえて「ハワイアン・スタディーズ」と題したことについて触れておきたい。「ハワイ研究」としなかった理由の一つには、日本における従来の「ハワイ研究」の系譜—日本人移民や日系社会に対する「きわめて強いまなざし」(山中 313)—との差別化にあった。また山中は、日本における沖縄文化に対する関心の高まりについても言及している

が、沖縄というコンテキストにおいて、沖縄系移民の歴史や社会について学ぶことは、研究対象としてではなく、自らの歴史を学ぶという意味で重要であり、「ハワイアン・スタディーズ」のシラバスにも盛り込んでいる。しかし、ここで注意したい点は、沖縄系移民について研究する際に、移動の「主体」として光のあたる沖縄人に対して、背景化されて、見えにくくなる存在がハワイ先住民であることだ。

ハワイの日系三世の研究者、カレン・コササ (Karen Kosasa) は、ハワイには「攪乱する二つの現実が共存している」と指摘する。一方は「民主主義国家、アメリカ」と、他方は「植民地化されたハワイアンの人々のネイション」である。コササはハワイにおけるアジア系移民が「移住者 (settler)」¹⁰⁾として、アメリカ植民地主義に加担している現実が見えにくい問題にアートを通して光を当て、移民がたどり着く前のハワイは決して、未開で、空っぽの空間ではなかったことを強調している。(Kosasa and Tomita 1997)

山中は、ハワイ研究は「先住民という当事者の参加を軸に激動の時期を迎えている」(316)と指摘する。ハワイ先住民の当事者性を尊重し、Native Voiceを中心化するというHawaiian studiesの理念を反映する意味で「ハワイアン・スタディーズ」と題したのは、意図しない“politics of citation”や植民地主義的な知の再生産に加担しない、またハワイ先住民の歴史や存在を矮小化し、背景化しないという、ハワイ先住民ではない研究者としての自分自身の立場や、政治性を意識したからである。

Ⅲ. 「ハワイアン・スタディーズ」における理論的柱②: Intersection

ハワイ大学の学部一般教養課程 (General Education) においては、4つのフォーカス領域 (1. Contemporary Ethical Issues; 2. HAP: Hawaiian, Asian, & Pacific Issues; 3. Oral Communication; 4. Writing Intensive) が設けられており、学部生はそれぞれのフォーカス領域に承認されている科目から学校や学部で定められた必修単位を取得することがカリキュラムとして組まれている。ここでは、ハワイについて学ぶ科目群として設置されたフォーカス領域、HAP (Hawaiian, Asian, & Pacific Issues) Focusについて注目したい。

HAP Focus科目として承認されるためには、ハワイ大学全体のシステムとして設置された基準 (Hallmarks) があり、該当科目の3分の2が以下の4つのHallmarksを満たしていることが条件になっている。

H1. 科目の内容が、ハワイ先住民文化とアジアまたは太平洋諸島の文化とのintersection (関わり、接点、交差性) を反映していること。

H1. The content should reflect the *intersection* of Asian and/or Pacific Island cultures with Native Hawaiian culture.

H2. この科目ではいかなる分野もしくは学際的なアプローチを用いることができ、ハワイやアジア太平洋の先住民の経験に基づいた世界観、価値観、文化的視座が学べること。

H2. A course can use any disciplinary or multi-disciplinary approach provided that a component of the course uses assignments or practice that encourage learning that comes from the cultural perspectives, values, and world views rooted in the experience of peoples indigenous to Hawai'i, the Pacific, and Asia.

H3. この科目では、当該地域における歴史、文化、信仰、芸術、社会的、政治的、経済的、技術的な様相を理解するのに必須なトピックを最低でも1つは取り上げること。例えば社会構造と自然環境の関係性など。

H3. A course should include at least one topic that is crucial to an understanding of the histories, or cultures, or beliefs, or the arts, or the societal, or political, or economic, or technological processes of these regions; for example, the relationships of societal structures to the natural environment.

H4. この科目では、多文化理解を深めるための徹底した分析や問題理解に取り組むこと。

H4. A course should involve an in-depth analysis or understanding of the issues being

studied in the hope of fostering multi-cultural respect and understanding.

以上のように明記されたHAP Focusが科目に求める基準のうち、特に注目したいのが、H1.で提示されている、“intersection”の部分である。これについては、さらに以下のようなことが追記されている。

ハワイ先住民文化ともう一つないし二つの地域との接点が肝要である。ハワイのみ、もしくは太平洋諸島のみ、またはアジアだけに特化した、また、ハワイ先住民の文化との関わりを含まない科目はH領域に該当しない。

The concept of intersection of Native Hawaiian culture with either or both of the other two regions is key. A course exclusively about Hawai'i, the Pacific Islands, or Asia is not eligible for an H designation. A course that does not include relationships with Native Hawaiian Culture is not eligible for an H designation.

当該科目においてはハワイ先住民の声と、接点を持つ対象地域における先住民の声の両方を、例えば、文献やビデオ、ゲストスピーカーやフィールド・トリップなどを通して含めなければならない。The course design must include both the Native Hawaiian voice and the native voice from the indigenous people of the area of intersection. These could be represented through publications, videos, guest speakers, or field trips, for example.

(“Hawaiian, Asian, & Pacific Issues Focus.”)

このようなHAP Focusにおける、“intersection”についての基準は、沖縄というコンテキストに照らし合わせて「ハワイアン・スタディーズ」をデザインするにあたって、重要な示唆を与えるものである。それは、なぜハワイを研究するのか、ハワイを通して沖縄という土地に生まれ育ったわれわれ沖縄人は何を学ぶのか、という重要な問いに、伝統的な「ハワイ研究」や「移民研究」ではなかったような糸口を与える

ものだからである。それはもちろん、暴力的にハワイを単なる研究対象としてまなざすことではなく、観光や癒しを求めて消費する対象にすることではない。それはハワイと沖縄の接点に“indigenous”（先住民）、“native voice”を中心に位置づける試みであり、またHawaiian studiesを通して、Okinawan studiesを「する」という試みに導くものである。

Goodyear-Ka'ōpuaは、このような対話関係（dialectic）が現代のHawaiian studiesにおける研究の中核をなすものと述べている。先祖との繋がりをもって自分たちが何者であるのか（who we are）ということをもHawaiian studiesにおいては確認するが、この作業は同時に自分たちが何者であるかという問い=Who are we? を提起するものでもあると述べている。アメリカ占領が続くハワイにおいては、先住民としてのアイデンティティを、理想化したり、形骸化することなしに、アメリカへの同化や米国市民であるという言説に対していかに戦略的に確立し、育むことができるかが、Hawaiian studies研究実践者にとって中心的な課題の一つであると論じている。（“Reproducing the Ropes” 6-7）

ここで、HAP Focusが求めるように、ハワイと沖縄を“indigenous”、“native voice”という結節点で繋げるとき、われわれ沖縄人も、このような“who we are / who are we”という対話の機会が与えられる。その対話によってHawaiian studiesを沖縄のコンテキストに置き換えたとき、沖縄が当たり前で、ウチナーンチュは当たり前で日本人だと考える若い学生たちが、日本への同化の歴史や日本国民であるという言説に対する新しい視座を持つことができるのではないだろうか。私がハワイで経験したトラスクとの出会いやHWST 107の授業、また、ハワイ先住民コミュニティにおける言語・文化復興の実践やネイションとしての主権を巡る学術的な議論や市民運動、そして土地を守る脱軍事化の闘いは、沖縄における言語復興や、脱植民地化、脱軍事化、そしてNative Okinawanとしての私とは何か、という対話を生み出したものであった。そのような対話の可能性を念頭に、HAP FocusのIntersectionの基準を「ハワイアン・スタディーズ」に反映させること、ハワイと沖縄を先住民の視点から比較する視点をできるだけ盛り込むこととした。

IV. 「ハワイアン・スタディーズ」における理論的柱③: Kuleana

Kuleanaとは英語訳では“rights, responsibilities, and authority”(権利、責任、特権)とされ、Hawaiian studiesやハワイ先住民コミュニティでは、最も大切にされている中心的な概念の一つである。¹¹⁾ ハワイ先住民研究者らは、kuleanaを以下のような要素のコンビネーションだと説明している。

- (1) 血筋・家系
genealogy
- (2) その場に住み、時間をかけて自然現象を洞察し自然と関わることを通して知識を得ること
residence or presence over time, allowing one to develop knowledge through continued observation and interaction with natural phenomena
- (3) 自然資源や社会資源を管理運営できること
demonstration of one's stewardship of natural and social resources
- (4) スピリチュアルなものを含めたコミュニティから認められること
affirmation from the (human and nonhuman) community, including spiritual forces
- (5) このようなkuleanaの実践を通して、一人ひとりが自らの土地との歴史的な関係、血縁的な関係や結びつきへの気づきを促し、そのことによって、植民地主義が続く現状が変わり得るきっかけを与えてくれる。

The practice of kuleana calls each person to be attentive to her or his historical, genealogical, and lived relationships to 'aina, and this provides openings to shift the conditions of possibility that sustain settler colonialisms.

(Aikau, Goodyear-Ka'ōpua, and Silva, 161)

このように、ハワイ先住民のkuleanaという概念は、大地('aina)との繋がりに深く基づいていることがわかる。それはまた、祖先との繋がりであり、コミュニティとの繋がりであり、その繋がりの中にハワイ

アンとしての特権があり、責任がある、という理念である。Hawaiian studiesの研究や教育の場、ハワイアンの文化実践や表現の場、コミュニティや家族、また政治的な運動の場においても、ハワイ先住民は常に自身のkuleanaは何かと問いかけ、自らの土地と祖先に由来した果たすべき責任を確認している。このような概念は、沖縄ではよく議論されるアイデンティティに代わって、沖縄人の島や、祖先、歴史、文化との関わり方に新しい視点を与えるものだと考える。このように、HWST 107の理念の1つでもあるkuleanaを沖縄における沖縄人、ウチナーンチュのkuleanaは何かという視点に繋げる可能性を模索したい。

V. 「ハワイアン・スタディーズ」ユニット構成～沖縄という文脈において～

ここまで、「ハワイアン・スタディーズ」のコース・デザインにおける理論的枠組みとした3つの理念、Native Voice; Intersection; Kuleanaについて概観してきた。最後に、HWST 107を土台として、沖縄の学生のための、沖縄をコンテキストとした「ハワイアン・スタディーズ」の授業の構成について、簡単に概要を記述する。

冊子として出版されているHWST 107のリーダー第2版(Losch and Kamahale)は7つのユニットで構成された、500ページ以上に上る膨大な量の、もちろんすべて英語(ハワイ語も含む)の文献集である。英語を母語としない、またハワイの歴史、文化等について基礎的な知識もない学生たちにとって、ハワイ大学マノア校におけるHWST 107をそっくりそのまま踏襲することは不可能である。そこで、Unitを3つに絞った、Leeward Community College(リーワード短期大学)のバージョン("Hawaiian Studies 107 Leeward Community College")を参考にして、以下のようなユニット構成とした。

1. Introduction: まなざしの転換とポジショナリティ

まず、本題のユニットに入る前に、やらないといけなかったことは、学生がすでに持っているハワイについての知識を脱構築する作業であった。多くの沖縄の学生とハワイとの関わりは、日本という文化的、経済的、政治的枠組みの中で構築されたものである。「ハワイ」というと、何をイメージしますか?ハワイにつ

いてどういうことを知っていますか?という問いに対する答えは、本屋にならぶ旅行雑誌に出てくるハワイ、もしくは沖縄のショッピング・モール内に最近増えたハワイ風なフードメニューなど、想像に難くないものばかりであった。日本における大衆文化、消費文化の中で表象されるハワイ像の中で、消費される対象になっている人は誰か、主体性のない背景になって、他者を癒す役割を求められる一方で、実生活における社会的地位は低く、苦しい生活に追いやられている人は誰なのか。このようにハワイ先住民の存在と現状を前景化することから「ハワイアン・スタディーズ」は始まる。

矢口祐人は、「ハワイと言えば、青い海と空、美しい砂浜、ショッピング、フラ…という連想は自然に生まれるものではない。」と指摘する。(矢口 iii)「ゆったり」「のんびり」「ナチュラル」といったように連想される先住民については(矢口 213)、沖縄も沖縄の外から似たように連想され、消費されてきたことと重ね合わせる視点を提示すると、ハワイアンをまなざす側から、まなざしの対象になるハワイ先住民と同じ側の立場に立つことが可能になる。さらに、消費される対象になるということについては、ハワイアンに加え、ネイティブ・アメリカンといった先住民のステレオタイプについて、実際の先住民たちのリアクションが、彼ら自身の声で語られるビデオプロジェクトなどを紹介することによって、先住民の声=Native Voiceを中心化する試みを行った。

このようなイントロダクションの後には、「ハワイアン・スタディーズ」は下記の5つのユニットで構成した。

2. Unit 1: Ka Wā Kāhiko: Origins and Native Spirituality

Kāhikoとは古代という意味を持つ。ここでは、ハワイアンはどこからきたのかという地理的、文化的、歴史的な起源について、西洋的な学問知識(考古学、遺伝学、言語学)と神話や口承伝統、ハワイ語での記述やハワイ先住民の歴史認識に基づいたハワイアンの知の伝統を比較する。特に土地との繋がりやハワイ語の重要性、海はハワイを孤立させ隔てていたものではなかったという視点を導入した。また、日本と沖縄の歴史的区分や考古学、言語学、遺伝学的な違いに関す

る議論についても紹介し、様々な創世神話があることにも触れた。

3. Unit 2: 'Ōlelo and Nā Mea 'Ike Honua; The Wisdom of the World

ハワイ語はハワイアンの世界観、文化、アイデンティティ、コミュニティを構築する土台である。特にハワイ語が英語に置き換えられていった歴史や、その影響、そして言語復興運動の歴史と現在について、沖縄の言葉巡る歴史と今とを比較する。

4. Unit 3: Okinawan Immigrant Experiences

HWST 107にはないセクションであるが、沖縄とハワイの接点における歴史的な文脈に合わせて、沖縄系移民の経験について盛り込む。しかし、ここでは移民した側(沖縄系)だけの視点や沖縄を中心とした歴史的な文脈のみに留まらず、移民を受け入れる側としてのハワイアンの視点を背景化せず、比較分析をする。また、ハワイアン・ルネッサンス時代を経た沖縄系の3世、4世以降の世代が、どのようにハワイアンの文化復興運動や主権回復運動から学び、ウチナーンチュとしてのアイデンティティを捉えなしてきたかについて、ハワイからのゲスト・スピーカーを迎えて議論する。

5. Unit 4: Mo'olelo: History and Contemporary Issues

歴史を意味する語だが、これには物語や神話も含めた意味での歴史、というハワイアンの歴史観が含まれている。ここでは、特にハワイ王国がどのようにアメリカの一州となっていったのかという歴史的経緯について、ドキュメンタリー映画Act of Warを参照しながら学ぶ。特にハワイアンは王国の転覆やアメリカ併合に反対したという抵抗の歴史にも焦点を当てる。同時に、琉球王国について、どのように世替りがなされてきたのか、どのように琉球が沖縄として日本の一部となっていったのかという視点も促す。

6. Unit 5: Hawaii x Okinawa Student Projects

それまでに学んだハワイについてのトピックやテーマと琉球・沖縄と比較対照して発表するプロジェクトのために組み入れたものである。A) 伝統的なハワイ、琉球/沖縄の人々の暮らし; B) ハワイ、琉球/沖縄

の人々にとって大切な概念、自然との繋がり；C) ハワイ、琉球／沖縄の信仰；D) ハワイ語、琉球諸語；E) ハワイ、琉球／沖縄の芸能、文化；F) ハワイ、琉球／沖縄の歴史における重要なターニングポイント；G) 世界のウチナーンチュ、移民の歴史と今；H) 現代社会の問題（観光、軍事化、開発、貧困格差問題）、以上からテーマを選び、チームまたは個人でリサーチをし、発表する。

おわりに

本稿では、HWST 107のシラバス及びハワイ大学一般教養課程におけるフォーカス領域HAP Focusの分析から、沖縄キリスト教学院大学における新設科目、「ハワイアン・スタディーズ」における3つの理論的枠組みの応用について描写した。これらの3つの理論は、ハワイを研究対象として学ぶ際に、単に外からハワイを一方向的にまなぐのではなく、ハワイの先住民の視点を中心化した脱植民地主義の視座から、ハワイと同様に日米の植民地主義、帝国主義にもまれ、世替わりを経験してきた琉球・沖縄を比較する視点を要求している。このような理論に基づいた「ハワイアン・スタディーズ」は、ハワイを通して沖縄の歴史や文化、現代社会における諸問題まで、“indigenous”（先住民）の視点から捉えなおす「オキナワン・スタディーズ」の学問的取組みとも言えるのではないだろうか。このような沖縄とハワイとの対話をより深化させるには、翻訳の問題や、琉球・沖縄関連の教科との連携など、さまざまな課題が残されている。今回は科目開設の初年度であるため、各ユニットのHWST 107との詳細な比較分析と実践については触れることができなかった。また、「ハワイ研修」の事前学習として位置づけられている科目のため、「ハワイアン・スタディーズ」と「ハワイ研修」の理論と実践における課題についても今後分析していきたい。

註

- 1) Haunani-Kay Trask (b.1949) 現在は病気療養中のため、教壇には立っていないという話を聞いている。トラスクの学術的及び先住民運動家としての功績については、Franklin and Lyons (2004) を参照。
- 2) 1990年代～2000年代にトラスクの学生として影響

を受けた世代が、学術的に現代ハワイ先住民運動を総括した研究が近年発表されている。ハワイ大学マノア校政治学部准教授Noelani Goodyear-Ka'ōpuaらによる *A Nation Rising: Hawaiian Movements for Life, Land, and Sovereignty* (2014) を参照。

- 3) ここでは、日本における「ハワイ研究」と区別するために、ハワイの学術コミュニティで使用されているHawaiian studiesをそのまま表記する。Goodyear-Ka'ōpua, “Reproducing the Ropes of Resistance” (2016) を参照。
- 4) 筆者訳。原文以下参照。“Her words also speak to the na'au (intestines, of heart or mind) of our (kākou) work in engaging in research; that is, to illuminate 'ike (knowledge, insight, understanding) that guides, (re) builds, strengthens, and sustains our ea (life, breath).” (Oliveira and Wright, ix.)
- 5) Hawaiian studiesを包括する上位学部の構成については、以下ウェブサイト参照。<http://manoa.hawaii.edu/hshk/>
- 6) Hawaiian studies関連科目の一覧は以下のウェブサイトから参照。<http://www.catalog.hawaii.edu/courses/departments/hwst.htm>
- 7) 2018年秋学期のハワイ大学マノア校の学部生登録数は以下のサイトを参照。<https://manoa.hawaii.edu/about/>
- 8) Traskは、Center for Hawaiian Studiesの建物ができるまでも、決して平坦な道のりではなかったとよく話していた。
- 9) 現在、どれだけのクラスでこのテキスト集が使用されているかは定かではない。シラバスで見ると、授業内で課されるリーディング教材や授業方針については、10年前と大きな違いはないように見受けられるが、現時点でHWST 107がどのような授業編成、運営がされているかアップデートすることは今後の課題である。
- 10) 沖縄系を含むアジア系移民による“Settler Colonialism”の議論については、崎原 (2011)、Fujikane and Okamura (2008) を参照。
- 11) Goodyear-Ka'ōpuaは、Hawaiian studiesの方法論において、kuleanaは最も重要であると断言し

ている。“Hawaiian studies methodologies take kuleana with the utmost seriousness.” (14)

引用・参考文献

- Aikau, Holulani K., Noelani Goodyear-Ka'ōpua, and Noenoe K. Silva. “The Practice of Kuleana: Reflections on Critical Indigenous Studies Through Trans-Indigenous Exchange.” *Critical Indigenous Studies: Engagements in First World Locations*, edited by Aileen Moreton-Robinson, Tucson, University of Arizona Press, 2016, pp.157-175.
- Trask, Haunani-Kay and Mililani Trask. “‘Iolani Palace, January 17, 1993.” Transcribed by Joan Lander. *Huihui: Navigating Art and Literature in the Pacific*, Kindle ed., edited by Jeffery Carroll, Brandy Nalani McDougall, Georganne Nordstrom, Honolulu, U. of Hawaii P, 2015, ch.9.
- Franklin, Cynthia G. & Lyons, Laura E. “Land, Leadership, and Nation: Haunani-Kay Trask on the Testimonial Uses Life Writing in Hawai‘i.” *Biography*, vol.27, no.1, Winter 2004, pp. 222-249. *Project Muse*, doi:10.1353/bio.2004.0032
- Fujikane, Candace and Jonathan Y. Okamura, editors. *Asian Settler Colonialism: From Local Governance to the Habits of Everyday Life in Hawai‘i*. U of Hawai‘i P, 2008.
- Goodyear-Ka'ōpua, Noelani. “Reproducing the Ropes of Resistance: Hawaiian Studies Methodologies.” *Kanaka ‘Ōiwi Methodologies: Mo‘olelo and Metaphor*, edited by Katrina-Ann R. Kapā‘anaokalāokeola Nākoa Oliveira et al., U of Hawai‘i P, 2016, pp.1-29.
- Goodyear-Ka'ōpua, Noelani, Ikaika Hussey, and Erin Kahunawaika‘ala Wright, editors. *A Nation Rising: Hawaiian Movements for Life, Land, and Sovereignty*. Durham and London, Duke UP, 2014.
- Losch, Tracie Ku‘uipo and Momi Kamahale, editors. *Hawai‘i: Center of the Pacific: Hawaiian Studies 107 Reader*. Second Edition, Unierstiry of Hawai‘i, Leeward Community Colledge, 2008.
- Oliveira, Katrina-Ann R. Kapā‘anaokalāokeola Nākoa and Erin Kahunawaika‘ala Wright. Editors’ Note. *Kanaka ‘Ōiwi Methodologies: Mo‘olelo and Metaphor*, U of Hawai‘i P, 2016, pp.ix-xiv.
- Osorio, Jonathan Kay Kamakawiwo‘ole. “Hawaiian Issues.” *The Value of Hawai‘i: Knowing the Past, Shaping the Future*, edited by Craig Howes and Jon Osorio, U of Hawai‘i P, 2010, pp.15-21.
- Trask, Haunani-Kay. “Kūpa‘a ‘Āina: Native Hawaiian Nationalism in Hawai‘i.” *From a Native Daughter: Colonialism & Sovereignty in Hawai‘i*. Common Courage Press, 1993, pp.87-110.
- Sylva, Noenoe K. *Aloha Betrayed: Native Hawaiian Resistance to American Colonialism*. Durham, Duke UP, 2004.
- Said, Edward W. *Orientalism*. New York, Vintage Books, 1978.
- 崎原千尋、「コロナリズムと移民の歴史の交差点— 沖縄とハワイ」、『けーし風』、第72号、2011年。
- ハウナニ=ケイ・トラスク著、『大地にしがみつけ：ハワイ先住民女性の訴え』、松原好次訳、春風社、2002年。
- 矢口祐人、『憧れのハワイ：日本人のハワイ観』、中央公論新社、2011年。
- 山中速人、「これからのハワイ研究——日本におけるハワイ研究の概観と展望」、『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』、後藤明・松原好次・塩谷亨編、関西学院大学出版会、2004年、pp.309-321。

Websites

“Hawaiian, Asian, & Pacific Issues Focus.” *University of Hawaii at Manoa, General Education Focus*, 2018, <https://www.hawaii.edu/gened/focus.htm#areas>. Accessed 10 December 2018.

“Hawaiian Studies, Leeward Community College.”

Leeward Community College, 2017, <http://hawaiianstudies107lcc.weebly.com/>. Accessed March 2017.

“Kamakakūokalani Center for Hawaiian Studies History Timeline.” *Hawai‘inuiākea School of Hawaiian Knowledge, University of Hawai‘i at Mānoa*, 2018, <https://manoa.hawaii.edu/hshk/units/kamakakuokalani/history-op/kchs-history-timeline/>. Accessed 9 November 2018.

Kosasa, Karen and Stan Tomina. “Uncommon Traits: Re/Locating Asia.” *Public Art Market Arcade Part II*. 1997, <http://old.cepagallery.org/exhibitions/relocatingasia/AS02.site/AS02.14.kosatomita.html>. Accessed 19 October 2018.

“Kualono: Ka Haka ‘Ula o Ke‘elikōlani, Doctor of Philosophy (Ph.d.) in Hawaiian and Indigenous Language and Cultural Revitalization.” *College of Hawaiian Language, University of Hawai‘i at Hilo*, 2018, <http://www.olelo.hawaii.edu/khuok/mhhphd.php>. Accessed 10 December 2018.

“The mission statement of Kamakakūokalani Center for Hawaiian Studies” *Hawai‘inuiākea School of Hawaiian Knowledge, University of Hawai‘i at Mānoa*, 2018, <http://manoa.hawaii.edu/hshk/units/kamakakuokalani/mission-op/>. Accessed 10 December 2018.

“University of Hawai‘i at Mānoa • Fall 2018 Class Availability.” *University of Hawai‘i*, 2018, <https://www.sis.hawaii.edu/uhdad/avail.classes?i=MAN&t=201910&s=HAW>. Accessed 8 November 2018.

Native Voice, Intersection, and Kuleana: Approaches to Course Design of Hawaiian Studies in Okinawa

Chihiro Sakihara Komine

Abstract

Okinawan Christian University has newly opened a course titled “Hawaiian Studies” in Fall 2018. This new course is offered primarily to prepare students who participate in 2-week study tour program in Kauai, Hawai‘i. This paper aims to describe how the instructor/author developed theoretical approaches to “Hawaiian Studies” course design in Okinawa based on general overview of Hawaiian studies in Hawai‘i and Japan in addition to the author’s learning experiences in Hawai‘i. This paper especially looks at an introductory Hawaiian studies survey course called “Hawaiian Studies 107” which has been widely offered in the University of Hawai‘i system and one of the focus areas in General Education at UH Mānoa that specifically deals with “Hawaiian, Asian and Pacific issues.” In so doing, the author discusses 3 main theoretical approaches to Hawaiian studies in Okinawa—1. Native Voice; 2. Intersection; and 3. Kuleana. The author argues that these theoretical approaches allow to produce a syllabus which critically engages not only with indigenous-centered Hawaiian studies but also with Okinawan studies from indigenous, decolonial perspective.

Keywords: Hawaiian studies, comparative indigenous studies, course design